

ぐつて、半鐘をたくつて、大砲作て、因果廻つて、勇氣がなくなつて、軍に弱くて、おけつがかるくて、お馬がはづんで、地の下くぐつて、お尻をまくつて、逃るで有だろ、コレ、阿部さんごふするつもりだ、一ツたにお前は人ではないぞへ、そふだ畜生め、細かちちよぼくれ、なはむき野郎を、ぞろ／＼引連、大宮八幡、遠馬と出かけて、笠着た儘で参詣する故、社人がごめりや、苦ふなひ杯挨拶するとは、玉げたこんだよ、弓矢の神なる八幡ぼさつに、無禮を働く畜生野郎め、あきて物さへ言れぬ、がり／＼野郎め、諸人のそしりをちつともかまはず、遠馬は附たり、假宅を／＼に嬉しさ半分、お多さんじやなければ、に／＼笑つて飛出る杯とは、あきれたものだよ、あげくの果には、遠馬で見染た十五の小娘、妾に置き込み、ちん／＼かもやら、わん／＼あひるで楽しむ杯とは、ごふしたこんだよ、おまけに世界の木像野郎が、妾や女中の手筋を頼めば、役替昇進させると言のは、ごふしたこんだよ、斯様に政事が亂れて居る物、七兩二分にてゲベルを買ふより、間男するほがよつばごましたよ、よふ／＼出来たるおらんだ製造、ゲベルは三千、御拂直段が下

直に定て、海防がりの役人始が引杯とは、扱て／＼さもしい、心のやつだよ、斯様なたわけが西洋流にて軍をする氣か、さつぱりわからぬ、なれども諸組の興力や同心、黒鉄何ぞに多分の手當を出したる上にて、稽古着なんごに股引はき込、頭巾を冠つて出かける杯とは、ごふしたこんだよ、段々こふじて今には残らず、髭でも延して、飯をば喰はずに、三度の食をば、犬猫ころして喰つて有だろ、此頃専ら蘭學流行、一文不通の當氣の奴が、アランマツシャを一冊上ると、先生顔にて、蘭書の調の出役杯とは片腹痛いぞ、後には定めし聖堂潰して、畜生の詞になるで有だろ、嵐に付ては百俵以下へは、取越し米にて被下杯とは、皆米もごきの書付面にて、少しは御家人いきつく積で悦び居たれば、間もなくお米が渡りてみたれば、こひつもやつぱり山師の細工で、諸人を一ばい、おこわにかけたる、今度お米に上下を渡すと言のは、扱て／＼きたいな仕方じやなひかへ、斯様な事では諸人の心は中々それねへ、却て氣先をそんする道理だ、是とは違つて今度のは紙、相場のよひのは、書損じやなひかへ、定めしこひつも春屋の米をば渡すで有だろ、命の

本なる兵糧并諸民をたすける粗藏なんぞは、こはれた儘にてじめつの本なる、大船なんぞを作ると言のは、ごふしたこんだよ、誠にこまつたべらば野郎だ、己が天下の政事が出来ぬで、諸人を頼で時務策しろとは、あきれたこんだよ、斯様に政事がまつくら闇なら、明るい御方に譲らじやアなるめへ、夫をばかまはず、恥とはしらの畜生野郎め、犬にもおこるせ、お役に立そな伊賀殿なんぞは、あきれて止めて、言たい事をば十分いはれて、病氣と號して引たじやなひかへ、出懸た土岐には評判よくつて、云甲斐なひのは無理でもねへのさ、伊勢がいきほひ吹せる但馬の老ぼれ、あほふの河内のでこすけ野郎が、己れがしん上に引別しやアがつて、天下の長者の臺所つめるは、ごふしたこんだよ、十露盤玉より鐵炮玉とて、ゲベルをかがせ、異人のまねして眞黒出立て、訓練させるは、當氣のしれもの、同じく息子も御見臺騒ぎに、さつまの家

中、口論初て、仕まひはあやまり、尻腰つかつて逃出す杯とは、ひきやうな腰ぬけ、よふ／＼諸人の恨がつもつて、目の玉飛出し死んだじやないかへ、悪をもつまねば、其身をほろぼすまでにはいたらず、斯様なや

つらが段々くたばりや、天下は太平、國家は豊になるのは目の前、今には伊勢さん并役人、天下の政事に預る小人、愚僧が寺中に、いにしへ住んだる狸じやなれど、仕まひには尻尾を出すで有だろ、ヤンレエ引、

濱の松風

青山屋敷門の柱へ、切門水物と大字に胡粉にて配し、又門の兩扉へ安石之小便、姦邪小人、南無阿彌陀佛、如此しるす、黒き門へ胡粉に油をまぜて、大字に書きたれば、洗ひても落ちず、其上を塀墨にて塗りて、其儘顯然たりと云ふ、安石は宋王王安石にて、字は介甫と云、荆公と稱せし人なり、文學有て政を擅にせり、菊の詩のことにて、東坡を黃州へ謫せしことなり、又右の門へ猫を四つ、下に蝶を畫たり、死にやあがれと云ふ判じ物なり、

又是より棚倉へ近道と落書したりと謂ふ、未御役中之事也可被下候と張札す、謂は死んで可被下と云ふこと也、

遠州無宿 越前小僧 非何處

此者儀、厚御高恩致忘却、私慾押領而已企而、金銀吹替に後藤三右衛門より三千兩申請、夫而已なら

ず、勝手向賄方を相頼、御用達町人身分之者を客分同様之取扱、重き御役勤候身分にも不似、其上長崎表高島四郎太夫より密々頼を受け、六萬兩にて其罪科を宥め、札差より三萬兩にて棄指にも仰出間敷儀被相頼候處、早速承届、其外種々自分勝手之儀被仰出之取繕、諸人難澁爲致候始末、重々不届に付、西丸下引廻之上、於品川獄門に行ふ者也、

卯閏九月

右閏九月十六日夜、何者之仕業にや、西丸下水野表門前に捨札を建て、翌朝四ツ時過、御徒目付立會にて取捨候也、

宋賢王安石傳來

新知上知丸 代金百石に付

但來辰年より十ヶ年御用可被成候、

欺上 狂飲 山氣

右三味へ人怨を加へ、佐倉炭にて煎じよし、石にて散々に打壞はし、備前燒の茶碗にて用ゆるなり、

但甲斐類は忌むべし、

御目印

人悦根

下總國

太沼印旛

益無

世間に羽倉かしもの御座候間、御用心可被成候、

流行いろは歌

一番に備前德利大ひは

ろ 六道の辻番壤す恐しや

は 齒を嚙んで悔めど甲斐は泣計

に 憎れて世に蔓し大面も

は 本領を減じた上に棚倉は

へ 尻を放つて尻をつぼめる糞白癡

少くなつて今はふるく

人の噂のあたりまへかも

人の噂のあたりまへかも

人の噂のあたりまへかも

人の噂のあたりまへかも

と 兎や角と己が田へのみ引水野

ち 智恵淺く深く欲りし慾の皮

り 理が非でも人の難儀を樂に

ぬ 縫仕事知らぬ身過の鳥獸

る 流浪して末は乞食の一家中

を 追々と家中が寄て泣面を

わ 湧て出た様に水野が大騒

か 金が降り又石が降り又今に

よ 世の中の人の難儀を今知れど

た 段々に抜齒の痛強なり

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

我身痛さに腹は氣がない

齒莖計で震ひてぞ居る
 歴々の身柄に恥す智惠淺く
 怨の不覺を取て殘念
 そ 底意地の悪さにするが身の報ひ
 つ 七代迄の祟り物をば
 面を見ろ皆青山の下屋敷
 ね 寄も觸るゝも死人同様
 根本から早々枯るゝ澤瀉は
 な 干上る沼の水の落口
 長々とは是から祝ふ信濃蕎麥
 打て換て最早太平
 ら 亂世のはしをさゝやき皺寄する
 眉を開いて恐悅々々
 む 無理非道横に車の戻り坂
 因果は早く廻り軋らず
 う 浮々と足を伸して高枕
 寐耳へ入りし水の驚く
 ゐ 印旛沼堀田も罪の掛り合
 窪みへ水の滴りしとは
 の 野呂馬故馬鹿故人の口々に

待伏をして引越を見る
 お 押強い寛政振りはきいた風
 吹倒されし人の氣の毒
 く 覆すもふ是切の難船や
 皆吹落す伊勢の神風
 や 止め度なき人の噂の口の葉に
 かゝる浮目を見るも天罰
 ま 間部河岸我儘小路取組んで
 見事に投た西の大關
 け 興覺めた清き工の知行替
 國替となる己が前表
 ふ 不束な不屈者とのこと
 目くじら立てゝ今は身の上
 こ 是は又夢ではないか夢ならば
 覺めよなごとはけちな野郎だ
 え 得て物は顔出ならぬ恥しさ
 人間並の皮は被れど
 て 天の網かゝるは知らず水の中
 尾鰭ののびし人は危ひ
 あ 淺間しや三子でも知る天の責

怨の深みで身を果すとは
 さ 猿智惠を猛き獸や笑ふらん
 冥土の象も娑婆の羊も
 き 金の塵拜領せしは己が身の
 沙汰さぞ知らぬ馬鹿の大將
 ゆ 湯豆腐の熱い御趣意の唐辛
 人を泣した科は身を喰ふ
 め 目の覺た後では夢の世の中
 覺悟極めて腹は擦れど
 み 皆主の罰さへ増よ印旛沼
 勤に乗るも縮尻の種
 し 白河の清き流の末汲まぬ
 濁を好む水の澤瀉
 る 得手勝手なしたる科の報來て
 斯るみちめを三田の押込
 ひ 人を皆泣した罪は替紋の
 錢の輪廻る因果觀面
 も もう是に懲々したと後悔も
 後の祭が崩れ始まり
 せ 世間中皆悦びの前祝ひ

べめたゝの手打賑はし
 す 既に身を仕舞したり毒蟲の
 喰込蟲の滴るゝ古河梨
 京 今日よりは千代萬代と悦の
 眉根を開く民は勇し
 流變の御詠一本六々
吟二作ル
 はるかににらむ金の鯨
 下總の沼の流屋いかならん
 上地が止んで豊なる秋
 野となりし町々廣き江戸の月
 根本を折て枯るゝ澤瀉
 ふんごしは自分免許の緋縮緬
 飛び物は寐待の月の出ぬ門
 西の方から西方へゆく
 再建の入札つもる感應寺
 旅よそひはむだな新潟
 腕白が小土手に直す土ほじり
 六道 錢も遣ふ時來て
 春の日よりも長ひ空さや
 ぶつさきの羽織も丸く脊の療治

近 在
 改 革
 天 命
 西 下
 法 華
 川 清
 普 請
 松 代
 利 運

水氣が抜けて賣れぬ古河梨
 三年も待て地震のゆり返し
 濱松風の止んでおだやか
 親類は色青ざめし運の月
 嵐の鳥居寐返りやせん
 此頃は尻がむづ／＼山谷堀
 一葉の蘆も霜にしほる、
 御退出又提灯のどぼし過
 銀も絞りの顔がちら／＼
 花やかにあすも地獄の薄化粧
 されて嬉しき町觸の札
 内證で祝ふ都の三ツ柏
 金座銀座の末をあんじる
 のつしりと備後表の青疊
 手持無沙汰になりし隠密
 御仁政是も棄指をまつの花
 千秋樂をうたふ長閑さ
 右御一巡

時節 跡部 町奉 五丁 九段 木中 番屋 長岡 五藤 福山 小菅 新政 執筆 南紀 泰平

印旛沼掘かけて今は止めらむ
 手持無沙汰となりし隠密
 そろ／＼と女髪結櫛そうじ
 張替にやる稽古三味線
 半襟をもう縮緬の仕立中
 菖蒲小倉の仕入見合せ
 木瓜は澤瀉よりも早く枯れ
 繩張をする水茶屋の地所
 閻魔より諏訪を桑名へ早飛脚
 みがき上たる鐵砲の錆
 今ぞ知る大成殿も作り物
 長い刀の中は竹光
 再興の入札つもる感應寺
 新瀉下田羽田むだ事
 わんぱくの堀の土手迄土いちり
 宙にぶらりん残る古河梨
 ぶつさきの羽織も丸く春の療治
 張臂強くなりし松代
 三年に二度の地震の早ふるひ
 日本に暗き濱松のかせ

篠折 富氣 町風 同娘 美服 吳倉 佐物 際美 革臥 川左 當時 運悅 水車 同車 同車 眞心 眞信 天性 澤瀉

世の中に甘みの届く蜜柑哉
 上地の止んで豊なるらん

此ごろは尻もむす／＼山谷堀
 ひと葉の蘆も色も末がれ
 燈し後夕提灯の御退出
 銀も絞も顔がちら／＼
 一類は色青ざめて物思ひ
 嵐の鳥居寐返りやせん
 門々はいはふうら錢三ツ柏
 また鑄直しと見ゆる百錢
 享寛の例は暫く御沙汰止
 皆萬歳を唱ふ萬歳 執筆 太平

堀和 新賀 孫槻 十掌 越前 岡早 長岡 親玉 親玉 太平

越前と云ふ人は、一に色々御ふれ事、二に憎れし報に
 て、三に下つた上地沙汰、四ツ世の中さわがして、五
 ツ印旛の御手傳、六ツむだ金遣ひ捨て、七ツ難儀とな
 りにけり、八ツ屋敷へ石がふり、九ツ後悔する内に、
 十でとう／＼御國替、大逆舞を見さいな、
 同じく

一に越前ふんばつて、二に日光つゝがなく、三に酒井
 を困らして、四ツ世の中けちらかし、五ツ印旛を掘か
 けて、六ツ無理なる事計り、七ツない事言上し、八ツ

屋敷を取巻かれ、九ツこまかに壊されて、十でとうと
 う引拂ひ、てんでこ舞を見さいな、

不破名古屋精當勝劣

遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見ま
 した亂暴出立、今流行の澤瀉組、通ひ馴れたる大手
 門、這入る則今度限り、株に離れた人達が、たへ兼て
 歎く聲高く、石降りかゝる坂の下、慾に慾ある其中
 に、ごろつき組が怒り來て、是を知らずや、生靈の集
 り見たか下馬の先、せきにせかれてしやくり泣、ふ
 くれて居てもひるに鹽、工む心のかひもなく、ねぐら
 通ふや三田屋敷、烈しく見えし彼の君も、工風の盡き
 た風俗を、上や下での評判は、西は濱松、北は棚倉、と
 ころかはらんはて困る、

役拂水づくし

目出度いな、嬉しいいな、目出度い今度の役替を、水盡
 しにて拂ませう、みなかみ清き井の頭、辨財天の池水
 より、流れ出たる水道の、落くる先は神田川、水道橋
 に御茶の水、さて此方には玉川の、光る源氏の御代な
 れば、行末永き上水と、四谷を掛て丸の内、其上水の
 中程に、小き沼の泥水に、はへ出したる澤瀉の、蔓こ

り次第に廣がりて、種々様々の水加減、知行の水呑百姓迄、難儀難行如何計り、此上据置くものならば、如何なる事を仕出さんと、ごら役拂がかいつかんで、遠州とは思へ共、餘り遠き事なれば、目より高くさし上て、水車の如くふり廻し、印旛沼へさらり〜、御役上申ませう、難有し、

眼鏡賣
印旛の罪、御眼鏡、鳥居甲斐ませう、
ゑちせんめし屋

此度青山へめし屋見世を出す、飯は朔日より引割めし、

御一人前永樂錢一つ

さいの物品々



- 一腹もきらす汁
- 一萬人のよろこぶ巻
- 一内々は金も鳥鍋
- 一上地の味噌漬
- 一鱈にもするめの付焼
- 一御用金をあげだし

一青山へ引なのひたし物 一門は玉子とし
一一夜に家財のくづし 一忠義と見えて山掛豆腐、
香の物御改革の名づけ、
智慧の淺づけ



一箱金千兩 大包金百兩 小包金五兩

- 一實ひせんによし、
- 一甲斐の目むやみ目によし、
- 一のどのはれによし、
- 一矢部のうらみによし、
- 一ひっあかによし、
- 一打傷辻こわし、
- 一諸家手出のならぬ、
- 右何れも上よりのとがめ治し難し、
- 神尾をした上使にて、大炊めに用ゆべし、
- 一此うわさの藥の儀は、よく〜心深き御方に

ては、一度用ゆれば下の愁を直し、實ある人の心配をほごき、世上やかましきを拂ひ、錢まわりよく、上知の沙汰止る事妙也、

禁物

- 一紀伊たけ 調合所 遠州濱松宿 不了簡閉門製
- 一車えび 江戸長谷川町 肝煎休三郎
- 一梅ぼし
- 一さなたい
- 右腹薬中大敵やくなり 取次所 二違比四郎



御免調合所 江戸取次 慾野増士製
取次所 今出屋 難十郎

おごりの大名薬
一第一下の奢りを止、上のよくを強くし、諸役人の爪を長くし、己が懐中をあたため、錢相場を定め、棄捐を留、諸色を引下げ、又は引上げ、人氣を荒立て、上の眼をくらがし、下の痛は少し

もかまはず、金銀の巡りを悪くし、自分は内證をよくし、諸家諸人の油を取り、武士旗本の生膽を抜き、大老のよだれにてねり、水野爪の垢ほごに丸め、諸事金の衣に包み、朝夕用ゆれば萬民の恨みを強くし、太平の世を騒がし、一粒用ゆれば一と騒すべし、大名寺社普請奉行にても御物入に忌むべし、

五大力

いつまで草のいつ迄も、印旛沼、なまなか出来て物思ひ、焼火の間たとへせかれてごふなるども、田えんと番頭の時節の末を待つ、野、ア、なんどせう、野、互の心打解て、土井、うはべは解けぬ五大力、部、さはさりながら、
伊替る色なき御風情、堀、やがてあをぞへ語るぞへ、
井上、根本、惜しき筆とめ候〜、棄捐、

おれ松

板元 越州屋越太郎 横松屋前吉
抑水野たくみ事、萬石をはじめ、大それたしかた、千人の知行を上させ、心迷はせ、俄かに天の網かゝり、石雨しきりに降りしかば、いかに此雨凌がんと、澤瀉の影へと寄りそへば、濱松たちまち枯木となり、枝も

枯れ葉も枯れて、茲の屋敷に居らばこそ、悪事洩れしかば、松はおし込どかや、斯様に明白と顯れしは、多くの人の悦び、氣味のよい事、其上に萬人集まつて、かゝる大勢辻番こはし、どうく〜と水野うちへ、投込石こそかなしけれ、

春駒

目出度や〜、ばれの始の濱松なんぞは、夢に見てさへ、よいとやまうす、

こより歌

一ツとや、獨りで政事をかき廻し、天罰夫れ見ろ、さしひかへ〜、
二ツとや、二人は元より手先、なか〜まだ〜、外にもありませう〜、
三ツとや、皆が憎がる越前を〜、はやく半知にして見たい〜、
四ツとや、夜晝か、つた印旛沼々々々、草臥もふけの御手傳々々々、
五ツとや、石や瓦を夜々中々々々、屋敷へ降るとは御新政々々々、
六ツとや、むやみに諸人を押倒し〜、報ひはつづれば

た辻番所々々々、
七ツとや、泣くにも泣かれぬ今迄の〜、悪事は今度で、目が覺めた〜、
八ツとや、屋敷はさら地の跡部殿々々々、しくじる所には惜いもの〜、
九ツとや、これから世の中治りて〜、誠の享保さなるばかり〜、
十ツとや、とつくり思案も大炊殿々々々、諸人の助かる世の中に〜、

役たい口

ナンダあの越前が儉約々々々もすさまじい、水野計りぬかして、土井つらも〜、人の穴ばかり堀田が、井伊事を間部はい、が、下總す井の中の蛙じやアねへか、井上の河内だ、玄蕃で堀の水でもぶつかけてやらつし、うそだか本多か知らねへが、越中か備中か、攝津くるしいふんごしの紐は、真田ア伊勢乞食じやアあるめいし、こんな事は唐にも大和にもありやアしねへ、世辭計言やアがつて、本庄の知れねへやつたア、大岡の捌きならモウちつといひことをしろへ、遠藤だか船頭だか知らねへが、梶野の取りやうが悪いから、

跡部からかひしやアがる、一つとして鳥居がないわい、主膳々々せり詰めて、大炊々々皆泣わい、御役人ではなくて、強悪人だア、馬鹿とし寄めへ、ナント奏者アねへか、寺社アなんと思ふ、

慢才

慾惡に愚慢才とは、お家を騒がしめます、愛敬さめける攻めの年寄、始めのあしたには冠かうべに頂き、邪見のくつを穿き玉ひ、世上あらして民をなやまし、誠に手ひごくさむらいける、寛政年中酉の年、規定を立てし真似をして、改まつたる柱立とは、誠につたなくさむらひける、先一本の柱は印旛數多の金銀を掘こんで、二本の柱は賑ふ所を引拂はせ、三本の柱は猿若町を場末にこしらへ、四本の柱は四六見世、初見世、夜たかをつぶします、五本の柱は御家人始め残らず、困しめまします、六本の柱は路次から裏屋をかき廻し、七本の柱は質屋の利足を元より高利になさります、八本の柱はばつち坊主や、乞食の世話までなさります、九本の柱は國のかみなら百姓迄、めつたに困しめまします、十本の柱は十里四方の土地をもくろみ、武功の筋目や御由緒なんぞは心得違と觸

出して、三十番神の所罰を蒙り、一人の越度となり、ます、さればこれから己が手下を殘らず引出、悪名殘す愚慢才の舞始め、是より才藏とも立て、ヤレ慢才慢才愚慢才、かつ、はだかつて大きくなつた、されば夫より大名小名御朱印武功をめつちやらこ、ヤレ茲御旗本が腹を立て、あそこやこの武功の人々騒ぎ立て、コ、ヤレ〜和歌山公がやつきとして、誠の道に問詰られ、あちらを向かれてきつくり、こちらを向れてきつくり〜、ゆきつまつたがよい氣味じやに、めつちやらこ、ことしのようなるよい年は、羽倉外記や藤田を始め、吟味の根本や井上迄も、皆一所に取つ捕へ、切米半分取上て逼塞させたら、武士から町人ちつくりべいは安心して、心持が直るべいに、コ、ヤレ〜天の谷で、水野の家はめつちやらこに〜、夫じやによつて、家來なんぞは誠に悲しうさむらいける、是から世上は改つて、萬民繁昌、百歳の御壽き、

いろは歌

いかに越前よ〜開け、ロくな事はせぬ故に、はんかなお江戸が行詰り、ニン〜困窮する計り、

ホご能事のあらざれば、へんび邊土に至る迄、トほうに暮る、計り也、チ者も賢者も押除けて、リ非辨へず威を振ひ、ヌしなき婦人を店がりし、ルらうする人数知らず、ヲにも増る極悪にて、ワが身内には出世させ、カゝる大事に及ぶのも、ヨの人々は云合り、タごへ方なき身の恥は、レンく積りし罪咎ぞ、ソば衆年寄押込みて、ツみなき矢部を改易し、ネ覺悪きも知らずして、ナかく威光を振ふなら、ランの起る基ぞや、ムり非道のみ行はせ、ソぬが成行斯あらんと、オのらぬ人の無りしを、ノつべらぼんと勤るは、オのが愆故身を果す、クにへ領地場所換も、ヤめに成たる難有さ、マごの慈悲を施せば、ケン者と人も仰ぐぞや、フか川岡場所取拂ひ、コびき町をも野原にし、エゴ中家を建させる、テン罰我身に報来て、アごは半知か棚倉か、サだまる迄のうき思ひ、キるには痛き腹也と、ユび差し笑ふ人々は、メに物見るを待居たり、ミぢめなごまの成行を、シるも知らぬも喜べり、エン慮御沙汰の濟迄は、ヒの消たる如くなり、

モはや逢ふ人非ざれば、セ間もほつ息を吐き、スへく豊に暮すのを、京より樂しむ目出度さよ、
ちよぼくれ
 是越前未だ盛んの頃、出来しものなり、作者は御坊主衆にて、御告に逢ひし由なり、
 ヤレく私慾によウ成、抑も水野が工風を聞ねへ、する事成す事、忠臣めかして、御時節だの何の彼のごて、天下の政事を己が氣儘に引搔廻して、なんぞと云ふごは寛政々々、儉約するにも法圖があらうに、ごんな目出度い旦那の祝儀も、献上の鯛さへお金で納め、あんまり卑しい汚ない根性、御威光がなくなる、沙風喰つたねぢけた濱松、廣い世界を小さい心で、世辭辯計じや、中々いけねへ、隠居が死なれて僅か半年、たつやた、ずに堂寺潰ぶして、御朱印取上げ、雨店壊して路頭に迷はせ、芝居は追立て、素人附合ちつともするなど、千兩役者も淨瑠璃太夫も、ぬつべらぼうの坊主にしやうの、奴にしやうの、揚句の果には義太夫娘を手錠で預けて、親仁やお袋ひぼして殺して、面白そな顔をするのは、ごんな魔王の生れ替りか、人面獸心古今の佞奸、老中で居ながら、論語も讀ぬか、善いも悪いも先の旦那の仕置た事だに、三年所か一年待

たずに、餘り無慈悲な御改革呼はり、世の中洗ひや身上の直しを、だしに遣つて下の難儀にや、少しも構はず、お坊さん育の旦那をあやかし、夜晝か、つて己が邪威なる櫻田始て、林も美濃部もみじめを見せ付、初手ば自分も握つた親方、ちよいと引くり返して、尤もらしく、ごを押したらそんな音が出る、忠臣振つても今迄お金を取れた諸侯のお臍がびく付、矢部を最初は道具に遣つて、徐ろくするくすんと落とし、其跡自分の御部屋の御叔父さん、さつさと引出し、無暗に立身、一つ穴から狐が段々這ひ出し、ド、のつまりはごんな底意が有るかも知らねへ、寛政本間の名代、越中輝かつぎにや、寄つても附かねへ、身の程知らずの、義理も名利も薩張り知らずに、無上の權門厳しく止させ、自分が一人でごつさり締上げ、強慾非道は日増に増長、あの儘置たら、花のお江戸は菰ッ被りの宿なし計で、居所があるまい、時に水戸公ごうした物だよ、面白可笑しく賢人めかして評判させても、逆巻く水野の勢こわいか、むやみ矢鱈に鎧で猪狩、お山に引込、溜息計で黙て見て居ちや、昔のお定違ふぞ、一番茲ちやア、旦那を諫めて狐も狸も、化の生體直様あ

らはし、世界の人をば救にやなるまい、今の氣色で三年置たら、素敵に魂消た騒動が起らう、いつか一度は、お爲になるやうな目鼻の揃つた人間出掛けて、押付太田も再勤させます、其時初めて天下太平ホウイ、
 同
 御役さんでも慾には迷ふ、ヤレくちよぼくれ、ちよぼがれ、今度世上の評判、聞ても呉んねへ、すんでのことに亂世の始り、大變事だよ、夫と云ふのも遠州の客人、過たる大役、小な心で、大きな世界を引搔廻して、一番最初が大事の旦那をだしに遣つて、お爲ごかにだましに欺して初る、享保寛政小楯に取て、儉約沙汰から十組つぶして、芝居を取除け、女郎をかためて、山伏法印丸めて仕舞つて、何の彼のごて、細かにちよんがれ、越中輝、昔の事だが、越前股引下がつまつて、全國縮まる、そこで水氣や脚氣の流行、ソレソレおらが隣の印旛さんをほじくれ、掘りも堀田が水めが吹出す、掛りの迷惑、困つた酒井ちや、仕舞にや林ご印旛と一緒に、あすの出羽にや、仕事か黒田よ、ごろに紛れて、へちやくごろく、途中のこやしも、おのが田へ引く水野の目論見、有らう事かよ、

お寺をいじめて、すつべら坊主をちよほくり出して、裏門通用のよし町もならぬと、閉口々々坊主の種切れ、佛が来たとして引導も面倒だ、寺を開いて還俗しようか、屋敷を開いてお臍の下をば、ちよん切遣すばなるまい、夫もいやなら、誠の武士なら、人にも言はれぬ百姓いちめて、年貢の増かた、可愛や百姓は寒の冬でも夏の暑さも、天氣が續けば水野のかけかた、夜も夜中も手足も摺子木、夫はそうとも思はぬ天罰、天魔の魅れか、御用のお金を、百里も先へごつさり背負して、十里の知行を八里九里かゝつて、七里の上げ下げ、元の木阿彌六里な五里かい、四里の來ぬ中、三里でも据て逃ればよいのに、二里になつたらどうがな仕様とて、つがない目論見、二里もないぞよ、人の報は恐い事だよ、今度はお陀佛、氣の毒千萬、流石は紀伊の大人、天下の御爲に夜中の御登城、常陸の親玉ごうしたこんだよ、高見で見物、水の掛引、土井の車がくる、廻れば、お金もお錢も廻りがよかろに、糸の車も小さくなるだろう、眞田もよかろう、阿部の伊勢イで御慈悲もあらう、花のお江戸も繁昌に成だろ、夫で天下泰平、國土安穩、敬つて申す、

七萬石半吉

濱松乗時震、何を云ふても、通ると思ふが思た、世の中の人に愛らす憎まるゝぞ、
四民遭毒窮、已れをひく人が有ても、何時迄も當てにはならぬぞ、
愛妻難産後、ついで心の鬼が身を賣るぞ、
竟倒若山風、この御籤に當る人は、私の願ふ事叶はず、縁組親類迄告あり、御籤の普請なれば出来ても終悪し、用金取立の旅立は中途に妨げあり、病氣は長引くべし、腹を切ればなほる、領分換の侍人は其罪己に來る、引越の失物に尋ても出でず、凡て儉約一ト通りよし、神佛を信心し、不動金比羅地藏辨天地へかへしてよし、

夢はし「世の中を己が氣儘になす上は、不時に高迄上りやせんか、酒井はそこになして居やる、」わたしや印旛に入つぶされ、金にこがれて居るわいな、

閨三十番凶

水沼落不清、水も始は清き物なれ共、段々さ慾が出る如くにて、未は沼田に落ち、泥水さなるらん、
野枯木青山、あつと枯れて青き芽も出さるゝ心なり、
越芝三田走、屋敷にも町にも住家ならず、今三反計の田の隅に住むと云ふ心なり、
前後大名固、前も後も武家に取巻れて、一人に明神を祈りてよし、體也、只々大

越無騒、備越恨、越目騒、御前聞、眼前報、以前報、門代守、筑體仇、門來守、
曾根勘右衛門の門へ落書
改革はやめになつたか曾根見たか

大關	關脇	小結	前頭	前頭	前頭
御旗本、老中は諸人の雜儀を停止し玉ふ	御趣意は是迄にて	腹を切る覺悟で	土井はさばらぬ	骨折てさんだ目に	
劍山	鏡岩	關の戸	稻川	小柳	相生
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
御直談、流石は御三家、屋敷へ石を投げん家も矢部の家もやわて出入閉門でぬのならば上水野の見ぬを越前の心底のまれば止					
要石	音羽山	橋張	繩張	鷺ヶ濱	兜山
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
御代は變つては、ごうか投られそうなる一度に風の、かばる、澤瀉も以前は横なる事も一頭勢、横なる事にや、中山の切腹も御役人の					
高砂	鳥井崎	追手風	唐津山	君ヶ嶽	若柳

蒙御免

晴雨共七日の間に三田へ引拂仕候

古川車太郎 勘進元和歌山 行司 松代錢之助 差添彦根山

大關	關脇	小結	前頭	前頭	前頭
親玉は何にも大坂は大金を御政道はあ	御政道はあ	越前は昨日に變る	是から世が直る	門前の見物	
不知火	御用木	荒馬	狹布の里	常磐山	黒雲
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
何時しか、屋敷に頼む人足引拂の直段は、あへば思ひな、町風俗を直した、水野はよい事なちつとも、問部は、勝部は、阿部は、御老中に					
越の海	高根山	頂柄山	手柄山	岩見山	桐山
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
蜜柑の匂ひは、濱松は上より下まで、水戸は國許にて、諸大名は水野が、個條を申す、御旗本上知の御沙汰にて腹を、是から、御觸、水野が首をくらはせる					
千代嶽	山下風	軍立	立神	龍ヶ崎	金根

運の原杏流

諸國へひらく
一ト廻り 櫻銀一分より
こころみさしひかへ 百文錢
あさいやし薬 六文錢

抑此方は先年唐津より渡り、京大坂を経て、江戸に止り、其名天下に聞き、大奥向よく用ひられ、御勝手掛より五畿内をはびこり、四五月比迄さし薬、けんもん奥深く差込、功能すみやかなる事請合、閏九月十三日目に成ては、一門方落て最早療治叶はず、併若き年寄衆、何も障りなし、上知の通沙汰止みに相流申候、身にも家にも障り候とも、惜者萬人に一人も無御座候、以上、

吟味言上所

江戸赤坂御門外
丸紀發言謹劑

川柳風

當用は足りても損な佐久良炭
古河梨は大きな程の甘みなし
根本から枯れて澤潟かれかゝる
佐久良炭はねて備後の表替

鳥井をば殘し本社を打こわし
水引て十里四方はもこの土
世の中の邪氣を陳皮で發散し
わな／＼と篠田の狐ふるへて居
霜枯になつて澤潟青くなり
此度はかげまどう／＼尻を喰
御勝手が五割増したですこゆるみ
六文で直段があると湯屋でいひ
信濃者御江戸をかせぐ無分別
越前も是から先はちんんで居
寒空に辻番こはす向ふ見す
吳の國の鳥が壁から足を出し
堀割は水の流れるために出來
水の越上下揉んで五十文
葱鮪鍋腹もの方を先へ切り
澤潟は水で育つて沼でかれ
越前をむくつて雁の仲間入
是からは和尚覺悟の前計り
投られた錢は乞食も喜ばず
石礫路は火の降る計なり

功能

- 一 第一大人の二日酔、うつとりとしたるによし、
 - 一 水の毒にあたりたるによし、
 - 一 諸士上知のうれいによし、
 - 一 大名飛地のおがるによし、
 - 一 町中不景氣、又は泣面を蜂のさしたるによし、
- 右の外、其効擧げて數へ難し、用ひ方水の高を減らし、病の淺深によりて考へて用ゆべし、常に此薬を服すれば、仁を増し奸を去り、黄金のめぐりをよくし、天下太平にせん快する事神の如し、功能用ひて知るべし、

御免本家調合所
紀伊國屋若山製
江戸喰邊外
水茶屋和歌の浦

取次所
見世不開、當日石つぶてもちけい物として澤山差上候、

白河の岸打波に引換て

井の上に水野あふれて根を枯らし
日光がきいて世の中辛くなり
印旛沼堀田甲斐なき水野あく
印旛沼元は水から出て放し
越前で堀田お尻を破られけり
棚倉へ流して仕舞水のあく
雪と墨心の違ふ善左衛門
降る石や瓦飛込む水野門
古沼へ金を投げ込む水の音



権家
轉動

權罪大當宜嚴、初九、濱松勿用、九二、見光無殿、可レ見捨於大人、見光、姪法名、俗名仲、九三、頑子終日聚斂、夕頃切腹、痛無レ答、九四、或落在三田、有レ答、九五、死靈在二矢部、宜レ殺二罪人、用九、拜領見無三甲斐、告三横領、有レ答、

日本
三家
之内

紀國救世丸

一廻代
六十四州

濱松風の音の烈しさ
哀れこそ今は我身に報來て

涙の雫水の流るゝ

越前の御難は九月十三日

牡丹餅ならで石々が降る

水鳥の浮寝の夢は墓なくも

覺て驚く濱松の風

世の中の垢抜けたるを知らずして

水が悪く人は云ふ也

三階はありし昔に河原者

見し編笠の内ぞゆかしき

三味線と葛の袴と入替て

てんつるてんの御代ぞ可笑き

世の中をしぼりばなしと思ふたが

かもめくゞと落ぶれにけり

世の中の垢を餘りに洗張

地の弱りしはあくが強いが

越前の皮をむくつて根本まで

押込られて下は井伊々々

ふり散し世を狂はする罪故に

遂に其身のはたきとぞなる
薩州がいひ了簡を掘出して

根本も末も枯るゝ濱松

焼付て少の内は用られ

長くは持たぬ備前徳利

永樂を鍍六文に鑄直して

通用もよし世も豊なり

世の中の掃除をせいと賜つて

其身をはたく金の采配

印旛沼堀田跡から水の出て

勘定違跡部後悔

是からは三度の食も喰かねて

湯でも呑れぬ水の越前

騒敷濱松風を吹散し

秋の野末に落る雁の間

徳川の清き流をせき止て

己が田へ引く水の憎さよ

武家は泣坊主は歎く其中に

何とて町はくへなかるらん

度々の御觸は水の泡となり

役にも立たぬ金の采配

泣暮て此城下を宿させば

石や今宵の礫なるらん

獻立が替つて料理甘くなり

越前飯は賣れぬ世の中

諸侯方上知の夢は覺果てゝ

皆々紀伊の思をぞする

濱松が臆病風を引込て

甲斐も能登へは通ざりけり

精出して早くかい出せ水車

印旛の沼の水の濁りを

水戸もない尾張大根國に居て

紀の國蜜柑味の好き哉

憎しとて尋來て見よ印旛沼

篠田の工み恨む大名

阿部は飛び佐倉は枯るゝ世の中に

何とて濱松つれなかるらん

御改革鳥岸角程利もせで

五百石とは高い藥禮

折もあれば竹八月に木六月

水野の腹は今が切り時

三味線の引手もないが三下

撥も近江の作はよけれぞ

思ひきや筑摩祭りの鍋も今日

太き鳥井にならふべしとは

印旛沼俄かに風のかはりてや

戸渡る船の梶の折れけり

濱松の倒れし跡の御祭りの

よしあし見るは柳よりして

石は飛び番所は壊す世の中に

何とて越は腹を切ない

水越と座頭の様な名を付て

上下揉んで腹はごうする

諸人悦こべ世上は静かになつたハヤイ、

新内節明鳥

うちには土井澤瀉を庭の枯木にくらし付、折ふし降

來る石つぶて、箒押取打音に、番の足輕すがりつき、

「マア待て下さんせ、あの澤瀉に悪ひ事があるなら

ば、私しを叱つてゆるして置て下さんせといつて、足

輕つき飛ばし、諸老大切身代大事、衆をなづくるは勤

變代記	八利住 天保十五年 二月加判之列	十幸貫 同十二年 六月同	七正雅 同十一年 十一月同	七忠温 同十四年 四月同	十一正篤 同四年 九月同	五詮勝 同年同 月同	四幸哉 同年十 月社	十忠義 同十年 十一月 代月	七忠邦 同十二 年九月 閉門	三十良弼 同年十 二月	三十忠耀 同十四 年四月 卯辰	二五備前 同九年 九月門	五外記 同年同 月門	差左 同年同 月	藤四 同四年 高同
まはへは 跡部と 雨店 聚拵の	子 丑 卯	はあや 水茶屋 御沙汰	まち 水茶屋 御沙汰	八月始 諸家無 別武町 の下人	木さ 化す	江戸大 變入御 改革に て	新編 奉行立 御普請	備前し のた	備中さ 備後	御役人 吹替	御役人 のく	御役人 のく	御役人 のく	御役人 のく	御役人 のく
諸家無 分別	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ
諸家無 分別	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ	八月始 池が ぶ

申 未 午	伊勢 は	駿河 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は
紀の國 の住	水野柳 倉へ	阿部	矢部	伊勢 は	駿河 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は
紀の國 の住	水野柳 倉へ	阿部	矢部	伊勢 は	駿河 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は
紀の國 の住	水野柳 倉へ	阿部	矢部	伊勢 は	駿河 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は	町奉行 は

小石川 本田は徳	亥 笑して	根本初倉里 の二階石 以上	下宿領を 毎	常陸の國に 江戸八百八 町の冬瓜を 十五 泉山に引く	上州の小人 三ツ五郎の 密蔵	大付藍色 し	小石川に開 門河岸出来	五 る	六 ははる 效力にてあ 出る伊勢の 金鈴分銅星	赤坂御門外 起の風大明 神多々越	十 大炊親爺用
-------------	----------	---------------------	-----------	--	----------------------	-----------	----------------	--------	-------------------------------------	------------------------	------------

の習ひ、今でも腹を切たなら、其苦しみはせまいもの、男ども氣を付いと、おくのへがいふ、

同綱五郎

「井上知らずに、うか〜とお役をしたが口惜しや、我身に恥て自ら、遠ざかりたるその中に、あアいたされてゑよふする、慾の報と云ひながら、大炊親爺め、意地悪めど、根本も羽倉も打捨投付け、やつぱり元の雁の間へ、面目もなき風情なり、

濱松の鹽汲

二上り「先ひとき替つた御代の印とて幾代榮へるつもりにて「かたみともらう金の采」もちつ馴れぬに威光振り、居つゝ紀伊のかたみ風に「近しき人も知ら波を、きゝつ驚き、けふおくる「美濃や林や美濃部じ

やとて、しんき〜を袖ぬれ〜て「今に嬉しき御膝許、君にや誰が告る武士、雁の間詰にやろうやら「聞ば町こそ嬉しがり、是から水野手先らが「先は一人又は二人三人投らるゝも心から「爰が大事や御役人、月日をまつて「居よふよ「聞見れば面白や「投られる水の引越しに、石ふる外はヤアしひ〜「何かけたて、番所を壊はす「てんやわんやにちりやちりちり、ばつと知たる評判も、腹も切らずに命がほしいか、數萬の人に憎がられ、面目なくて家もこそ〜、青山屋敷へそつと忍んで逃にけり、「片荷こそ今はゆく共駄賃はくれぬ「太田出るのをたのしみに、大炊も眞田に取入つて、二人の内でかしかりを、棄指にさうぞ頼むぞへ、「かした奴等のエ、氣味のよき、「泣て騒か

笑ふていよか、又は今度の役人を憎がるものは金貸し〜「是から深ふいひかわしまの、水野がしやうもあらかた「人の噂は神無月ぎり〜「ほんにい、お、かせいだものは「まつに長いは女房達、それへ〜「氣を揉んで居た此方の人、「此子に土産買て来た、あい

あいちやんどいわれたら、「水野評判眞實誠であるかいな、おもひも寄らぬ「世直りも「有難や〜「御役御免の篠田親子「夫に引換て堀田に井上、根本から澤瀉枯れたる哀れなり、「濱松の〜、噂は世々に残らん、皆無利々々握々よ、上知々々あわ、かいぐり〜ごんだめ、あたまてん〜はつてやれ、

み 身の上を知らで澤瀉風情して
田沼の跡に水のひて枯れ
づ 隅々を取拂たる越前も
西丸下を拂はれにけり
の のご口をほした報ひが来たかして
今は我身もたつた越前
が 皮を被た人間並の眞似をして
御役にたつたと思ふ愚かさ

わ 悪者が札差質屋いたぶつて
取たる金も皆んな封印
る 留守居籠澤山寄せた越前も
く 留守を遣つて名代で請け
口々に言振らしたる濱松は
ち 嵐の跡で根本から枯れ
智恵淺き心から出た知行替
己が知行を今は案じる

遠州濱松の客人に御馳走の次第座付
御茶、山吹はならぬとあれば、高の爪も悪く、貴賤し水は掘井戸があくが強い故、水戸がよからふ、イヤイヤ水切故、綾瀬川から取寄せませう、
御茶菓子、白木の南無三寶也、ちう酒が違ひ、御酒は御役人の鯛菱か、かみやのきくか、江戸がさびれた、澤瀉の鬼殺した、
御肴硯蓋、御用金絲昆布、臍の下くすぐつ鯛、切身一家親類くわいのおぼろ煮、御旗本のぎせい豆腐、こんな御年は玉子焼、
味噌御吸物、あらこものひらき吸口、諸人のせうがたけ、

焼物、ほうとうの氣びらき、新薑つき、さし身、武家はかつぎの大根おろし、百姓町人はひらめのからし味噌、大平、深川の名物むき蛤、辨天の銀猫、根津のもふ小、谷中のいろは、岡場所よせ豆腐、いづれも吉原にて葛掛、つもり肴、たいめんくと申たらば、客人が下戸やら呑んだほれやら、一向に見へません、酒は御嫌だらふ、御膳がよからう、

御膳

汁、水戸前のさばらぬ、あんかけはじき豆、香物、日光唐辛、せん、澤庵、茄子の辛漬、繪、淺漬でおさらばく、けんは御定、紀の國蜜柑の小口切、飯、吟味して身の終米、ひやめし、御膳は何膳出ます、知れた事だ越前だ、猪口、みつ葉のひたしもの、煮豆、水野が屋敷内へいしなき、



ごう水坊、大おふ丈しせんか「御役御免の越前故に、新見の勤もなき内に、伊賀からしくじるく、下の評判、町々で鳥居甲斐さる、町奉行、跡目で後悔するよりも、能登でも突て死んだなら、市中は喜ぶ事であらふ、ア、トツチリトントツチリトン、

わるわざ口上

當代々々、御評判は高うムリ升が、是より口上を以て申上げ升、此度御改革の折柄、何がな珍敷藝道御覽に入度存升れば、御改革の工風人志野藤四始めとして、同志の者共工みましたる太夫の根本、遠州濱松下り御役御免わるわざを御覽に入れ升先は御免御目通り差控させ升、最初相勤升る兩藝道は、從四位だけ、三階に上り、八方を見下し、自由自在に働き升、こやこやと細かに差圖の體にムリ升、又三寸の舌を以て諸方の金銀を追々手許へ引入れ升、筒様に仕升れば、中段を勤る十三太



寢覺 <small>か悪かる</small> 諸事人の念力 <small>で計りでも</small> な情 <small>は少</small> 何事 <small>も勘辨す</small>	屋岡場所 <small>苦行の</small> 難行 <small>目につく</small> ら落書 <small>も門へ大</small> 落雁 <small>の身な</small> 樂 <small>つたあれ</small>	女髪結 <small>な</small> 頼光 <small>の繪は</small> 無分別 <small>の越前も</small> 無理 <small>思つて居る</small> 空虛者 <small>だ</small>	印旛沼 <small>の事</small> 井上 <small>一人が言出した事でも</small> の乗物 <small>を馬に</small>	農家 <small>ケ數言</small> 能 <small>引越の</small> 罵 <small>ある人も</small> く櫛 <small>は鬘甲</small> 喰物 <small>を馬に</small>	一人 <small>で暈</small> 暗闇 <small>かたかな</small> や役 <small>御計り出</small> 燒石 <small>に</small>	奢り <small>事じやれ</small> 位 <small>位は</small> 眞先 <small>水野の</small> 吹毛 <small>疵を求</small>	け <small>沙汰も</small> 家來 <small>に</small> 賢人 <small>あり</small> 吹毛 <small>疵を求</small>	ふ <small>も知ら</small> 不風流 <small>はふ</small> 不器用 <small>はふ</small> 故 <small>い</small>	こ <small>雖有</small> 國恩 <small>御用</small> 見 <small>て</small> 兒供 <small>や</small> 小僧 <small>や</small> 小前 <small>一</small> 寸 <small>分</small>	宴遊 <small>い</small> 惡 <small>遠足</small> の御役 <small>は</small>
--	--	---	---	--	--	--	---	---	--	--

貞節 <small>のふり</small> 方便 <small>をし</small> 天道 <small>が</small> 照 <small>して</small> 手際 <small>が</small> 出来 <small>あ</small>	商人 <small>の</small> 安心 <small>した</small> 餘 <small>なく</small> 酒 <small>悪</small>	肴 <small>は</small> 幸 <small>な</small> 算段 <small>はない</small> き <small>緑</small> 木求 <small>れ</small> 魚 <small>を</small>	白川 <small>の</small> 向後 <small>中</small> 遊興 <small>から</small> 油断 <small>する</small> め <small>目</small> 出度 <small>ふ</small>	納 <small>に</small> 面目 <small>だ</small> 御願 <small>れ</small> 盲人 <small>だ</small> み <small>名</small> 聞 <small>り</small> 身 <small>の上</small> 名利 <small>の</small>	仕當 <small>で</small> なる <small>榮華</small> 極 <small>め</small> 遠國 <small>一人</small> 蝦夷 <small>に</small> 火 <small>の</small> 心 <small>の</small>	得手 <small>勝手</small> の <small>寄</small> ひ <small>非</small> 分 <small>の</small> 獨者 <small>の</small> 火 <small>の</small> 心 <small>の</small>	非人 <small>だ</small> の <small>交</small> り <small>の</small> も <small>本</small> 無 <small>の</small> 催 <small>だ</small> 黙 <small>然</small> 思 <small>最</small> 中 <small>病</small>	引 <small>の</small> 御 <small>意</small> 以 <small>の</small> 外 <small>肝</small> な <small>遺</small> せ <small>先</small> 祖 <small>の</small> 功 <small>の</small> 洗 <small>濯</small> は <small>非</small> 殺 <small>生</small>	同様 <small>善</small> 事 <small>を</small> 専 <small>一</small> す <small>寸</small> 善 <small>尺</small> 魔 <small>に</small> 速 <small>た</small> 田 <small>は</small> 捨 <small>餘</small>
--	---	---	--	--	--	---	---	--	---

たものなる人
いも直を加判末太平
にして

落し斬

水野の屋敷へ石を投しもの召捕れ、町奉行鳥井甲斐守御役宅にて吟味、「此度越前殿御屋敷へ石を投、亂妨せしは如何の心得ぢや、町人」石をなげました覺は御座りません、「イヤ如何様陳じても、石を投げたに違ひあるまひ、町人」イヤ「御改革とやらで町方難儀いたしましたゆゑ、御不審は御尤で御座り升が、「石を投げた覺えはないと申すか、フンそんなら石を投げたでなうて、いしをかへしたのであらふ、

家老何がし、越前守殿へ切腹をす、めければ、越州イヤ此方は腹は痛いから、舌を噛んで死ふと思ふ、家老「それは餘り御卑怯千萬、舌を召上るも、御腹を遊ばすも、いたさにかはる事は、越州イヤ「あるわい、此方は是迄下の痛みは構はぬ、」

同

毎夜々々越前殿の屋敷内を火の玉が轉がるゆゑ、人の思だろふとこほがり、口によせければ、「我は辻番

同

の壊されし炭團の幽靈なりと、大笑々々、

越前殿、殊の外寒むがり、ねこといへる物に火を入れ

白菊の氣味よく晴れし月夜哉
厚き恵みを知るよし□稻
おもだかの見るに甲斐なく秋暮て
七つが鳴れど膝が崩れぬ
嵐から根付かぬ木々の根がゆるみ
坊主々々ど何をさ、やく
後悔の二字を忘れし夏の蟲
御殿のひけは今日も日の暮
昔しと違ふて弱き上田じま
備前物にはなまくらもあり
こんだ手が抜けて將棊の泊り詰
夜通し通る羽倉山ぶし
兵糧の御船廻しも御沙汰やみ
疊表が第一の出来
土井ふきは少しもつても昔ふき

切身正しき組板の魚
難波から花の御江戸へ饒相場
しりがむすくすみれほる人
春風がふけば目を出す柏の葉
四寸ながいと切つめるさや
掛川の葛の仕込も加減物
日々に世話敷須原出雲寺
そろく塗家の壁もはげかゝる
菓子料理屋も今は舊跡
甲州もおし付流行る道具市
とも臺所も火の消た様
請負の普請小路は休みかふ
河岸の茶店は引てから月
受つ船にはあれの戻らぬ検見跡
浮世の秋は知らず具足師
新がたの雪も脈はず初奉公
笠三がひも賣れぬ評判
鐵砲に弓よ早月のかざり物
町の人氣の引立し春
幾千歳松の都や花ざかり

目出度御代を祝ふ蝶鳥
殿中手鞠歌
一とや、一人の相手がしくじつてく、おじけが付て
出されないく、こわいわいな、水野
二とや、ふだんは氣がよく見ゆれ共々々々、まさか
の時には此病がく、遣繰わいな、土井
三とや、未練な事だがいま更にく、家來に對して
氣の毒さく、弱わいわいな、堀田
四とや、餘程思案が有そふでく、御首が曲つて直ら
ないく、可笑わいな、眞田
五とや、居付いた計りで彼方此方どく、度々屋敷が
替はく、五月蠅わいな、間部
六とや、無暗に御趣意の其中でく、過分の御高を取
どはく、忠がないわいな、堀
七とや、何事するにも慎んでく、御代の評判大出來
だく、日々に宜わいな、大岡
八とや、役に立たない其くせにく、御勝手掛になつ
たとはく、厚顔敷わいな、堀田攝
九とや、こゝへもあちへも借金がく、積りて御役が
勤るかく、浮雲わいな、遠藤

十とや、ごこへも知れない權門にく、此世の中でも
黙りてく、取氣じやわいな、本庄
十一とや、一番人よりお若くてく、御役に立たも御
先祖のく、御影ぢやわいな、本多
十二とや、西丸勤に廻されてく、皆の御役を斷たの
がく、口惜いわいな、松平玄

七草

お前なくなく、印旛の沼と土地のさたと、わからの
うちに、己が役をストンく、
天保十四癸卯年閏九月二日午之刻、
一頭より足の先迄六尺程、
一手の長さ二尺五寸程、
一頭大さ三尺廻りと覺、
一爪長さ八寸程、
一鼻至て低し、
一面體猿の如し、
一眼の丸み月の如し、
一口の大き二尺、
此度下總國印旛沼古堀分水路御用掛酒井左衛門尉、
水野出羽守、林播磨守、黒田甲斐守被仰付候處、辨

天山と申邊、並底深き沼有之、川丈程も難相計候
由、追々人力を盡し候得共、一夜の間に泥水吹出し、
翌朝元の如に相成、此度者甲斐守掛り候間、家來作事
奉行町田勘左衛門と申者巡見致し、供三人召連、辨天
山に暫く遠見致候處、俄に風吹出し、間もなく其邊光
り輝き、其内より右の圃の如き物飛出し、岩に腰をか
け候様子見届候由、供之者三人即死致し、彼人早々罷
歸り青く相成候間、追々相尋ね候處、右之趣繪圖荒増
書付け候間、委敷相尋候次第、尤當人も無程死去致し
候由、一本に此文を甚しく潤色し、御勘定所への
御届書になしたるあり、笑ふべし、
天保十五年甲辰六月廿一日再勤加判之列上座被仰
付、
弘化二乙巳月御役御免、
今度濱松アひごい事アしまい、横に車は二度出さ
ぬ
堀當て水の勢凄い、土井つも舌を牧野阿部こへ
堀水野搔廻したらごの様に澄か濁か知れぬ世の中
坊主はまたよせと云ふのに水いじり
濱松候任三首輔奉箋伸賀、林 銑
由來相業屬英資、物望除君口口誰、棟梁器人應

再仰、水魚恩是世皆知、月逢冥蝕、明何減、松歷嚴霜、翠益滋、聊擬寸心酬、厚春、即今當順却呈規、申渡之覺

水野越前守

名代野田甲斐守

其方勤役中不正之取計共有之段、追々達御聽候、依之屹度可被仰付候處、出格之以思召、御加増一萬石、本知之内一萬石、并居屋敷家作共被召上、隱居被仰付候、屋敷罷越致、屹度慎可罷在候、

越前守嫡子

水野金五郎

名代戸塚豊後守

其方父越前守勤役中不正之取計共有之候に付、隱居被仰付致、屹居、屹度慎可罷在、旨被仰付、其方為家督、五萬石被下、雁之間詰被仰付、追而所替可被仰付候、差控可罷在候、

堀大和守

名代榑原隠岐守

其方勤役中不正之取計共有之段、追々達御聽候、依之屹度可被仰付候處、出格之以思召、御加増

七千石、本知之内三千石被召上、隱居被仰付、逼塞仕可罷在候、

大知守嫡子

堀左近將監

其方父大和守勤役中不正之取計共有之候に付、隱居被仰付、逼塞仕可罷在、旨被仰付、其方為家督、一萬七千石被下、前々之通柳之間席被仰付、差控可罷在候、

右於三戸田山城守宅、老中列座、同人申渡之、大目付土岐丹後守、御目付石谷鐵之丞相越す、

佐倉白河堀田備中守 忍佐倉松平下總守

笹山濱松青山下總守 山形笹山秋元但馬守

濱松堀倉水野越前守 白川忍阿部能登守

堀倉山形松平周防守

右之通所替被仰付、

右者風説之儘記之、全者流言也、

濱の松風終

龍の宮夢物語

常陸國茨城郡の邊り知食、何がしの中納言某々となん申奉る、やごなき君ぞ御座しまし、ける、あやある大御政の十餘り二年といふ年の秋の始つかたより、御心地あしく、御あしの氣惱御座まし、日をふるま、にいよ、御惱重らせ玉ひ、葉月四日夜なん、遂にはかなくならせ玉ふ、兼てより公さまの若君御一方申下し參らせて、御世嗣となし參らせんとの、礫川の御館に侍る老臣等あらましなりしを、常陸に侍はる、老臣等はじめ、こゝらの殿原漏聞うべなわす、國內こそりて騒ぎあひ、中納言殿御惱十分重らせ玉ふこと、四日の夜半過ごろ、聞と等しく、老臣等はじめうち參りて、興津長門守、朝比奈彌太郎など主となりて相はかり、山邊主水正石の嫡子兵庫、御家老、松平司書文公の弟、御が嫡子將監五、兩人を選出して、江戸の御館に遣す、従行者百五十餘人と聞ゆ、各馬に乗て鎗たばさみつ、歩行にて行も鎗は持ちたり、兵庫が馬は常陸の府中にて疲れて斃ぬれば、農家の馬と

りて乗りつ、五日の朝常陸を出て、坂東道二百二十里が程を一日半にうち、六日の曉、丑みつ頃に礫川の御館に着たり、中にも吉成又右衛門近習番、三雙なきはや走りなりければ、鐘かたげつ、兵庫が馬に走り着て、礫川に着きぬれど、忘れたる事有りて引かへして、常陸の方に歸り行ぬるが、其日の黄昏にふた、礫川の御館に來りぬ、往還坂東道四百四十里が程なりけり、斯て兵庫は小川町なる己が家に入りぬ、百五十餘人の殿原も、五十餘人は兵庫が家に、五十餘人は春日町なる大こく屋といふ旅店にをり、五十餘人は上富坂町俗には御差の旅店借りて居つ、さても中納言殿には、かゝる事なん豫て御心がまへや御座しけん、御弟敬三郎殿御世繼に定奉れとの御置文を、三年の先に書置玉ひ、見させ玉ふ所こそ御座しけん、近頃他より召させ玉ひて、御近習番に拜せし岡井富三郎百石、に、密に附屬御座しませしと聞えしが、その富三郎、その年のうちに身まかりて、その御置文も如何になり行けん、何處にありとも知る人もなかりければ、兵庫、將監も心ぐるしく思ひ惱み居り、然るに根本三十三郎江戸史、富三郎よりその御置文を受傳へけるま、

に、兵庫、將監がり訪ひて御置文與へければ、兩人もいよ／＼志意を堅硬にして、今日この置文はやういださまく思ひしかど、あやぶむ處有りて、兩人の來るを待けるこそ聞へし、兵庫は六日の朝、御館の評定場といふ所に出つ、老臣鈴木石見守、榊原淡路守、岡崎平兵衛並居たる、次の間には關十兵衛庭奉行、三百石、藤田虎之助、三十三、史館總裁次郎左衛門の子にて總裁代也、三十四年以前に中納言殿を諫奉らんこと、常陸より父子ともに江戸に來り、六十餘日居たる、會澤恆藏、史館勤、廿、杉本千太郎、館事有り、左右なき忠臣也、會澤恆藏四十五歳、杉本千太郎廿三歳、桑山幾太郎江戶小十人、さふら本もと常陸より從來る者共也、此外にも川瀬一郎右衛門は、三年以前罪ならぬ罪負ひて、蟄居といふものにおしすくめられ居つれど、かばかりの御大事なれば、押てその子十八歳なるを伴ひて、江戸に來りつれど、憚りて此所へは出ず、吉成又右衛門は常陸より歸りこず、江戸に志を同ふせし鈴木玄龍とて、奥醫師某の子いまだ仕へ奉らねば出ず、皆川庄右衛門とて先年同心、三、石井仁兵衛、隼人の繼子留守居同心也、四十五、六歳、此兩人は其身賤ければ憚りて不出、兵庫老臣に向ひて申さる、やう、こたび中納言殿の

御事は、申奉らんもかしこくこそ候へ、御跡の御事は、御弟敬三郎殿かしづき奉らん事餘儀なく覺へ侍ふ、さるを公様の若君申下し參らせて、御家しろし召させんとの結構侍ふよし、竊に承りぬ、そは如何成所レ謂侍ひての事にもや侍ふらん、いぶかしくこそ覺へ侍れと申されければ、次の間より關十兵衛、上の座の末程に出で、其所以は己つばらかに聞へ奉らん、敬三郎殿には兼て各にも知し召れ候半か、御耳のうとく御座し、御世繼には定め奉りがたく、其餘には御子連も御連枝連も御座しませず、且は去頃焼亡せし御館御守殿造作奉らん御用金も侍らす、公さまの若君をもて御世繼となし侍らんには、それらの事も申さずしてはかゆくべし、其餘にも御願も多なるべく、御館さま御便ともならせ玉ひて、然るべからんとの御あらましにて、をとなたちも御はからひ侍ひて、已に仰下されしまに／＼、辰の口殿へ參り、ごかく申侍ひて、からふじて若君御一方申下す事にはなり侍ひぬ、さるをいなみ申させ玉ひ候はゞ、御元は申迄も侍らす、御館さまの御上迄如何なる御禍か出來侍らひなん、あなゆゝしと申もはてぬに、兵庫は側なる

刀とりて、柄に手をかけ膝つゝ、たて、十兵衛をにらまへ聲はげまし、やをれ十兵衛よ、尾州、紀伊の兩の殿は御子連枝とて御座しませねば、左も有なん、こなたさまには御連枝敬三郎殿にも、かねて御世嗣になさせまほし玉ひて、御置文さへ有るを、年頃あらぬ御病あるよしを申し奉りて、黄金に眼つぶれて、公さまの御若君をもつて御世繼となし參らせ、威公、義公の御血脈をたち、中納言殿の御置文を引たがへ、敬三郎殿をば何れの地に置奉らんとの結構ぞや、かゝる正なき事やはある、常陸のおとなたち、斯申兵庫、其餘二百餘りの常陸の殿原、一人も受引申さじ、今一度申て見よ、そこ立さじといきまきつゝ、いふ、次の座の藤田をはじめ四人の殿原も、刀引よせ、すはどいはゞ、かふとぞけしきばむ、その勢ひのすさまじくおそろしさよ、十兵衛いろ眞青になりて、次の間に退出ぬ、扱兵庫は老臣に向ひ、各にはいかに／＼とせりかけせりかけ詞かくれば、各色かへて息づき居、はてしなれば、さはまかりなるとて、兵庫はじめ常陸の殿原等は退出ぬ、兵庫、將監深く思ひはかる所有て、將監は旅宿に残りて其消息を伺ひ居て、その夜亥の刻計りに

成ぬれば、兵庫、將監は旅宿を出で、吉成、藤田、會澤、杉本、桑山の殿原を伴ひ、丑の刻比、大塚の吹上なる守山の侍從頼慎朝臣の許、密に參りて、朝臣に見參を請ふ、不時の見參は御館の掟も侍り、且は夜半過ぬれば、あすこそと許されず、兵庫申次に向ひて申やう、御館の御大事によりて、わざと夜半にまぎれて、ひそかに參り侍らひぬ、今夜の見參ゆるさせ御座しませらんに、各是にて腹かき切侍らひなんと申にぞ、あこみ驚きて、朝臣俄に出居に出て見參有り、兵庫申やうは、此度中納言殿なくならせ玉ひてより、礪川の御館に侍ふ老臣等の結構にて、公さまの若君申下して、御世嗣となし參らせんとぞ計り侍ふ、中納言殿にも敬三郎殿をこそ御世嗣にはと思召し置玉ひ侍へ、さるに敬三郎殿をおき奉り、あだし君をもて御世嗣となし奉らん事は、常陸のものども、何れもうべなひ奉り侍らはず、されば此事申止め、敬三郎殿御世繼に申定め奉らんことこそ、各には參りつゞひ侍れ、あはれ朝臣の御力もてひたすらに、公さま申直し玉ひ、敬三郎殿御世嗣に申定め玉はれ、深く頼み參らせ侍らふと、涙と／＼もに申ければ、朝臣宣ふやう、常陸の

殿原かく迄の忠臣なる、實にいみじう目出度こそ覺れ、頼愼が力の堪なん程は、いかにも申直しなむ、さりながら公より押して仰下されん時には、頼愼が力の申止る限りにあらしと宣ひければ、また申様、たとへ公さまより仰に候ても、各には引受奉らじ、さらんには各生き候て常陸へ罷歸まじ、其條にても、きと申止め玉ん事をこそねぎ侍らへと申ければ、さらば猶頼愼が身にかへて申止め、あしうは計ひ申さじと宣ひければ、ひたすら頼み參らせ侍ふとて、各罷出ぬ、斯ていかに申なし玉ひけん、其事止まりて、敬三郎殿御世嗣に定させ玉ふよし、慥に承りて、おなじ八日にぞ、兵庫、將監其餘の殿原も、江戸を立て常陸には歸りける、もし敬三郎殿御世繼の事ことゆかず、公さまの若君おし下されなば、敬三郎殿より奉り、常陸の御城になし奉り、御腹召させ參らせ、各にも腹かき切て、一城畑となしはてんと、各金打して誓ひつゝ、江戸に來りし百五十の外に、千住驛をはじめて、常陸までの次々の驛々に、こゝら殿原やごり居しとぞ承る、同十六日に中納言殿うせさせ玉ふ事、公さまに披露申させ玉ひければ、天が下七日物の音とめさせ玉ふ、後の

御諡は哀公史記の諡法恭仁に短折を哀と云と見ゆ、うへも論ひたるに申へし、と稱へ奉る、されば哀公の御志のまに、敬三郎殿御世繼と定り、天地の共動なく、常磐に堅磐に安らけく平けく御國定め奉り玉ひし、諸の臣達の功は、いともかしこく、尊くこそ覺ゆれ、こはそのかたさまの人に聞つるまを、筆に物して書つけつ、中山備中守殿はいまだ年若く、山野邊主水正殿は年老ぬれば、其事にはあづからざると承りし、霜月九日、武藏人入江の盈水かきつ、此記を龍の宮夢物語とも名づけ侍るは、龍宮の一名を水府とも申せばなり、

神原淡路守
同 新九郎
御役料七百石御足高二百石被召上、隱居被仰付、本祿之内八百石被下、寄合指引是迄之通、岡崎平兵衛
同 采女
御役料三百石被召上、隱居、家督千三百石被下、寄合指引是迄之通、關十兵衛
御庭奉行

御次小姓十兵衛養子
同 勝五郎
隱居被仰付、本祿之内百石、家督被下、御書院番被仰付之、

御勘定奉行 茅根 幸右衛門
實子總領 同 六左衛門
隱居被仰付、本祿之内百石被下、御水土藏番被仰付、水府引越相勤候様、御勘定奉行 太田 要人
奥御筆頭取 別所左兵衛

御國小普請被仰付、早々罷下り相愼可罷出旨、大關次郎右衛門
同
高二百石被召上、七人扶持被下置候、水庭源助
同
同斷、五人扶持被下置候、小普請被仰付、水府罷下同様、

御國御庭懸 加藤木 庄八郎
御國書院番被仰付、御役被召放、

同 井土辰五郎
御國小普請組被仰付、高百石被召上、五人扶持被下之、御城附列 大久保 伊麻助

御國小普請被仰付、御足高被召上、七石二人扶持被下之、
十二月廿四日
中納言公の玉ひける儘に此國をうけつぎて
齊 昭
中々に我玉の緒も絶へもせば
つぎてこの世のうさなからまし
つぎくにしめさんごよめる
尋ねても麓の里のしらねば
尾上の雲のたちなかくしそ
鈴木石見守に賜ふ
千々に思ふひとつむくひもあらぬ哉
三十とせ民に恵れし身の
自筆、用人羽太半左衛門に御渡の御書付
五節句式日は先公の時之通、其外常膳には、朝夕は一

汁一菜計、但一汁一菜之時、向皿にても壺の者にても有之候は、平は無用之事、夕は汁計、汁は大根菜ふき冬瓜烏芋ゆば豆腐、右三度同じ品にてもよろしく、肴は鯛鯉赤エイ鮫鱈より外は迷惑に存候、右品も好候時計にて、常膳には無用之事、右之外好候て申付候事も、臨時に候得共不記候て、魚は水府より參候計用候、尤客來節句式日等は飾の事故、何方の品を用候ても宜候、但水府より參候肴も是迄之通にて宜敷候、度々取寄候に不及候、御守殿にて御膳被爲召候節も、右心得にてよろしく候、右之通致候ても、是迄の食には勝候得共、是迄のことを忘れ不申候様致たく候、儉約にて致候儀には無之候、是迄一汁一菜にて仕來り候處、養生に宜様に覺候得者、右之通りこしらへ候様可申付候、去ながら右之通致候ては、臺所働人益に成兼候得ば、一汁一菜の分、何程も多拵候様、是又可申付候、前文に申付候通り、式日等には臺所頭了簡次第獻立仕候様、連枝方客來之節は、一汁三菜焼物吸物祝蓋差身位の事にて可然候、

先御遣領被進、御登城之節、御家老中被申上候は、明日萬事出羽守殿へ御心添御頼可然候、御使御頼可申遣旨被申上候得共、出羽守へ別段頼候譯は無之、月番之老中差引次第にて宜敷候間、無用仕候様被仰付候、御登城之上、我等耳うさく候間、小音にて被申聞無之様頼入候と御申被成候由、夫故か上意も殊外御大音にて候由、御禮之節御指御大小此節御拵有之候、御刀二尺八寸、御脇差二尺一寸之由、江戸御役人一向思召に不叶、與津長門守兼々出府之由、柳原淡路守、此度之一件不埒隨一に候處、殊の外御首尾能候之由、是は思召有之之事之沙汰有之由、大久保伊麻助捧物仕候處、下賤之者不入事之由御意にて、御覽も無之、早々下げ候様、何れ今助は退られ可申、其外權家立入候もの不首尾に可成候、出羽守様より御菓子か大遣成品進上有之候處、出羽守何の由緒も無之、進物可有之之等無之候間、差戻候様に被仰、御腹立に候由、後老中大に困り、右は間違にて、御靈前へ上吳候様頼成候を、心得違にて申上候由申上候得ば、夫ならば夫なりと御意有之、御近習向へ被仰候は、右はやはり我等へ送り物也、御

靈前へ備候と申候故、先夫なりにいたし置候と御意被成候由、御通事役何某迎、御途中にて下座も不致位の者に候處、御相續後甚輕薄諂諛之儀申上候處、其手はたぬと被仰候間、甚赤面仕、當時薄水を踏候心地之由、文武の稽古場へ不時に御出、御覽可被遊旨被仰出候也、

寅正月十六日御直書

一文武は武士の大道にて、人々出精可致事、依之之時不三相達候、只精不精は追て可及沙汰一條、以來右様可存候事
一存寄有之族は、何役にても右無遠慮、何れよりなり共封書差出可申事

正月十六日

文政十三年庚寅三月、借抄于鳥羽桐鳩君、此文頭似源語、身似太平記、尾似院本、稱謂鶴辭亦可、茶村老夫戲記、

龍の宮夢物語終

龍の宮夢物語

列侯深祕錄終

六百七

山田安榮
伊藤千可良 校
岩橋小彌太

大正三年五月二十日印刷
大正三年五月廿五日發行

(列侯深秘錄)
非賣品

編輯者兼

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
早川純三郎

印刷者

東京市芝區櫻田和泉町七番地
高宗啓藏

印刷所

東京市芝區櫻田和泉町七番地
國書刊行會第二工場

發行所

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會

不許
複製

人主17-72

不 鄭
精 誤

大正三年五月廿五日
大正三年五月廿五日
大正三年五月廿五日

四
年
川
三
三

終

